

研修通信 ～夏季公開講座～

8月3日(月)、独立行政法人国立特別教育総合研究所 研究企画部 研究員 山口遼 様をお招きして、「特別な支援を必要とする幼児児童への指導について」をテーマに夏季公開講座を開催しました。

他校からもたくさんの方に参加していただきました。ありがとうございました。



講演の内容

①幼児期から学齢期までの発達【発達について知る】

「ジャン・ピアジェの認知発達理論」について、子どもが経験を通してどのように物事を理解し、認知を発達させていくのかを具体例を交えながら学びました。「ジャン・ピアジェの認知発達理論」では、子どもは「スキーマ（経験を通して形成される、物事を理解するための心の枠組み）」をもとに新しいことを学ぶとされています。例えば、「犬は四本足でしっぽがある動物」というスキーマを持つ子どもは、似た特徴を持つ動物を見ると「犬だ」と理解します。（同化：今持っているスキーマを、新しい経験に当てはめる）しかし、猫を見て犬との違いに気づくと、「犬とは別に猫という動物がいる」とスキーマを修正します。（調節：今持っているスキーマを、合うように修正する）このように、子どもは経験を通して知識を広げたり修正したりしながら成長していくことを学びました。また、ヴィゴツキーの理論（子どもたちは主体的・能動的に学習している。子どもの学習や行動は社会的状況の中で行われる）も紹介され、子ども自身の経験や学びに加え、周囲の人との関わりや環境が発達を支えることについても学びました。

②実践につなぐ子ども理解の考え方【子どもを理解する】

発達検査や知能検査の種類と特徴、結果の解釈や支援へのつなげ方を学びました。知能検査結果をそのまま捉えるのではなく、行動観察やABC分析を通して、行動の背景にある状況や環境にも着目することの大切さを学びました。一人ひとりの実態を多面的に捉え、適切な支援につなげていくことの重要性を再確認する機会となりました。

☆ABC分析 … Antecedent：行動が起こる前に何があったのか Behavior：どんな行動をしたのか
Consequence：その行動の後に何が起こったのか）を考える方法

③子ども理解に基づく発達支援の考え方【その子に合った支援をする】

発達検査や知能検査などのフォーマルアセスメントと、日頃の行動観察や本人・周囲から聞き取って得られるインフォーマルアセスメントを組み合わせ、子どもの実態を多角的かつ客観的に評価することの重要性について学びました。子どもの成長や育ちの姿を保護者と共有し、園と家庭が同じ方向を向いて支援に取り組むためには、日頃から信頼関係を築き、安心して相談や情報共有ができる環境を構築することが大切であることを学びました。

☆アセスメント … 子どもの発達や行動、環境などを多角的に据え、支援につなげるための情報収集・分析

④子どもの個性が輝く、指導・支援に向けて【一人ひとりの個性を生かす】

インクルーシブな保育について学び、一人ひとりの発達や特性、強みを理解しながら、誰もが安心して過ごせる環境づくりの大切さについて理解を深めました。また、子どもの姿だけでなく、保護者の子どもへの思いや悩みにも気づき、寄り添うことの重要性について学びました。子どもの成長や育ちの姿を保護者と共有し、園と家庭が同じ方向を向いて支援に取り組むためには、日頃から信頼関係を築き、安心して相談や情報共有ができる関係を構築することが大切であることを学びました。

最後に

・アセスメントは必ず行うもの

子どもの姿を多角的・客観的に描き、解像度を高めることが大切。
的確な実態把握が、子どもの教育・支援に必ず生かされる。

・アセスメントツールの使用は第一選択肢ではない

日々の観察や見立てが何よりも求められる専門性。
検査結果だけでなく、日常の行動観察や聞き取りなどのアセスメントも重視していく。

・情報は集めてからが本番

集めた情報をもとに、なぜ検査を行ったのか、主訴に照らして検討し、指導・支援をデザインする。

・アセスメントは“チーム”で対応

一人で抱え込まず、教職員や保護者・関係者と協力しながら、エビデンスに基づいた教育・支援の工夫をみんなで（チームで）考えることが大切。
と、お話いただきました。

今回の学びを日々子どもたちとの関わりに生かし、子ども一人ひとりの姿を丁寧に見つめ、その子らしさを大切にしながら、保護者との信頼関係を築き、ともに子どもの育ちを支えていけるよう努めていきたいと思います。

貴重な学びの機会をいただきました山口様に、心より感謝申し上げます。